

# 形

forme

教科書特集号



日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

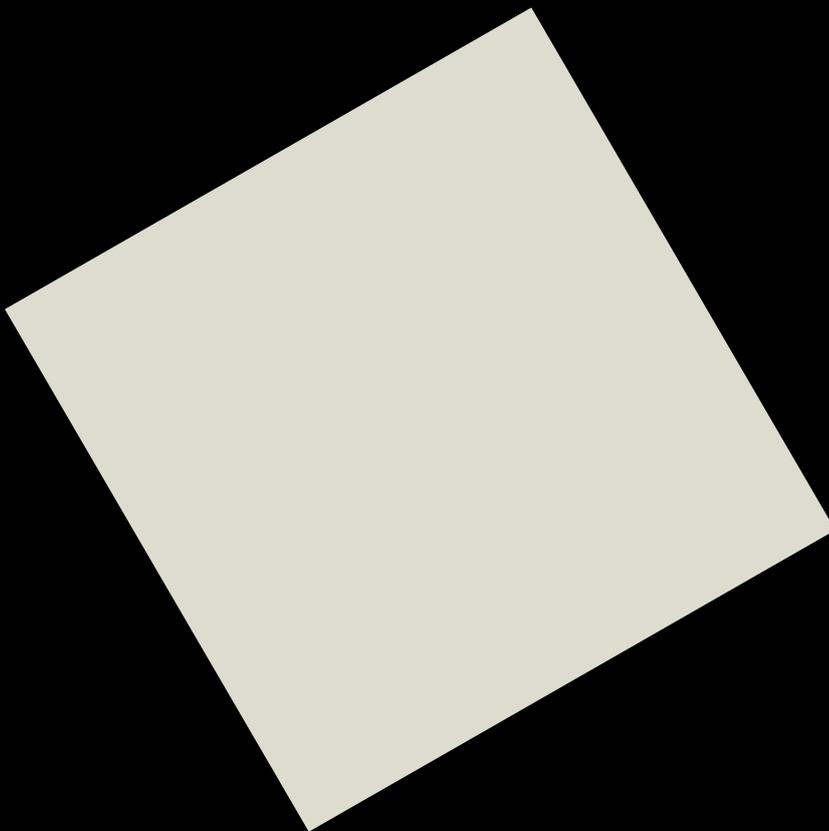
日文

検索

# 开 + 多

Nr.03

かたちについて、ここで、あらためて。



特集

# 新しい教科書

新しい教科書には常に教科の〈今〉と〈これから〉が映し出されている。

それは図画工作とて例外ではない。

では図画工作の〈今〉とは？ 〈これから〉とは？

今回は、編集に携わっていただいた先生方への七つの質問を通して  
図画工作の〈今〉を見つめ〈これから〉を展望していきたい。

新しい図画工作の教科書がどのようなものなのか  
ご覧いただく際の一つの指針にしていだけたら。

# これからの図画工作

たのしいな おもしろいな  
ずがこうさく

1・2  
上

日本文教出版



# Q

## 1 図画工作とはどのような教科ですか？

アンケートからは、「自分」「他者」という二つの言葉が浮かび上がりました。「自分」に関することは、更に二つの姿で見取ることができます。一つは「自分はこういうことが好きなんだ」という自己発見の姿、もう一つは「できた！」という達成感から生まれる自己肯定の姿です。

### 「自分に関すること」

- ・自分の思いを実現するために挑んだり……
- ・新たな自分を発見する
- ・自分自身に気付き、自分自身に肯定感を持つ
- ・自分のやりたいことを見付け、自分で考え、決めつくりだす喜びを味わえる
- ・自分を形や色で表現する
- ・〈わたし〉の確立
- ・もっている力を存分に発揮できる
- ・自分自身で感じ考える

### 「他者に関すること」

- ・周囲に働きかける（インサイド→アウト）の学び
- ・意味や価値を〈創造〉していく
- ・友だちを理解し友だちとつながる
- ・他者と理解し合う
- ・新鮮な見方や考え方を提示したり……
- ・独自の答えを生みだす
- ・世界を更新し続ける
- ・自分なりの新たな価値を生み出していく

### 「価値をつくりだす教科」

- ・ボディブローのように後になってきいてくる
- ・子どもたちの明日をつくる教科。明日の子どもたちをつくる教科



### 自己発見と自己肯定

子どもたちに初めから表したいことがあるとは限りません。材料や用具に触れるうちに、丁度よい形を見付けることもあります。それは、そういう自分に気付く、つまり自分自身を発見することと言えます。

自己肯定はそうした自分の中で形になったイメージを具体的に立ち上げることができた時に生まれるのでしょう。

ただ、思い通りにいかなければ自己肯定感が得られないということでもないようです。何度も試すという姿自体が自己肯定の一つの姿なのかも知れません。

### 他者という存在

同じ材料を使って同じ時間を過ごしているにも関わらず、自分と違う考えをして、自分と違う発見をし、自分と違うものをつくりだす他者＝友だちを知ること、それは「自己を発見する」活動を一斉授業として行うことによる効果だと考えられます。

材料を取りに行くような移動中にも

友だちの様子や作品を見、「自分と違う」ことへの驚きと感心をもてるのは図画工作ならではの姿ではないでしょうか。また「他者」には、友だちのみならず、材料や用具など周りにある「モノ」も含まれます。造形活動を通して今まで意識しなかったモノの存在を認めることができるのも大きな特長と言えます。

### 価値をつくりだす教科

「自己」そして「他者」への気付きは、新しい「価値」をつくりだしていると言えます。「形や色」という「モノ」を通してそれらを行う造形活動は根源的なものではないでしょうか。

これらはすぐに効き目があるのではなく、遅効性、言わば子どもたちの明日のための活動と言えます。



## Q 2 図画工作の時間を通して育みたい 子どもの力とは？

本誌では図画工作で育みたい力を「ためす」力、「かわる」力、「つくりだす」力として特集を組んできましたが、これらの言葉も数多く見られました。また、形や色という造形要素で活動することの意味についても語られました。

### 「ためす かわる つくりだす」

- ・ 試行錯誤を楽しめる力
- ・ 試行錯誤しながら自分の方法で自己更新していく
- ・ つくりだす喜びを培いながら新しい意味をつくりだす創造
- ・ 主体的に対象や事象にかかわり、新たな価値を生み出していく
- ・ 他者と協同しながら新しいものをクリエイトする
- ・ 自分の感じ方で、考えをつくり出し、表すこと
- ・ 自分や人、もの、こととつながろうとする力
- ・ 自己をつくりだしていく熱源や希望を失わないでもらいたい
- ・ 主体的に働きかけようとする態度
- ・ 思いを形に表すことに楽しんで取り組む
- ・ ヒトやモノやコトとかわり自分が自分になっていく
- ・ 世界（もの・こと・ひと・場所）と積極的に関わり合って
- ・ 周囲のものやひとにかかわって何かを創り出そうとする
- ・ 自分なりの考えを生みだす

### 「非言語的なものの捉え方」

- ・ 視覚的、造形的で構造的な思考力
- ・ 伝えたい事柄について……視覚化という方法を駆使しながら伝えようという意思
- ・ 言葉では表しきれない内容を可視化して
- ・ 造形的な視点から見たり考えたりして
- ・ 仕事や娯楽でも、事故や災害時でも……
- ・ イメージできる力



### ためす かわる つくりだす

「ためす」力、「つくりだす」力は図画工作の活動では直感的に分かりやすいと思いますが、そこに「主体的」という態度を見取ることが重要です。

一方「かわる」という言葉は「〜に」という対象が必要ですが、アンケートでは「ヒト」「モノ」「こと」「場所」がキーワードとして浮かび上がってきました。

造形活動は、否応なしに何かをつくりだす活動です。材料や用具と関わり、そこに「モノ」が生まれれば「ヒト」が集い、コミュニケーションが生まれる。造形にはそうした力があることを子どもたちも知ってもらい、そうした場を生みだす力を身に付けてほしい、という願いがアンケートから感じられます。

### 非言語的な認識

また、「非言語的なモノの考え方・とらえ方」という回答がありました。例えば言葉は論理的な思考ですが、我々は図を使って考えたり、空間的に物事を把握したりします。こうした図像的・空間的な認識も、図画工作での活動によって育まれる力の一つと言えるでしょう。

図画工作では少なくとも、外界に向かって働きかける「ためす」「かわる」「つくりだす」という力と、「造形的に世界を認識する」という「世界のとらえ方に関する力」を育むことができそうです。これらの力とともに、子どもたちが社会を「しなやか」に生きていく力として重要なものではないでしょうか。



### 3 図画工作の時間に大切にしたいことは？

では実際にそうした力を育むためには、どのようなことが大切なのでしょうか？アンケートでは「時間・空間」「題材の設定」ということが先ず浮かび上がってきました。

#### 「時間・空間」

- ・ 日常
- ・ チャレンジできる……風土
- ・ 自ら自由に発想できる環境
- ・ 考えることとその時間
- ・ 子どもが考える、子どもが見付ける
- ・ 子どもがつくりだすということを十分に保障する
- ・ よい意味での冗長性
- ・ 余白のようなものを担保する―逸脱、停滞、反復を許容する―時間
- ・ 自分なりに手ごたえを感じ取ることができるような時間や環境
- ・ 子どもがものを身体で感じ、じっと考えることができる時間

#### 「題材」

- ・ ナンセンスで楽しい
- ・ 魅力ある題材
- ・ 一人ひとりの子どもの持てる力が拓かれる題材
- ・ 行為、材料、意味の洗練
- ・ 必要な材料や用具、方法についての選択肢が持てるような支援
- ・ プロセスを支える

#### 「先生の姿」

- ・ 迷いも思い付きも失敗も成功も丸ごと受け止めること
- ・ 子どもたちが一生懸命表現しようとする行為を、まず無条件で受け入れてみる
- ・ 一人ひとりの違いを大切に
- ・ 子どもの感じ方、考え方を大切にしたい
- ・ それぞれの子どものイメージの中で何が起きているのか、ということを感じる
- ・ 信じて待つ

#### 時間・空間を保障する

何よりも、普段から子どもたちがどんなに試したり、協力し合ったりしながら活動できる雰囲気や場所をつくっておくことは大切です。

同時に、活動の時間的・空間的な余裕も重要ですが、現状は、それらを保障することはなかなか難しく、教科の価値を發揮するには十分ではないようです。このことは、これからの図画工作を考える上で重要な課題と言えます。

#### 題材の設定

子どもたちがやってみたいと思える題材設定も大切な要素です。やってみて、という関心や意欲を高めるだけでなく、Q2で見えてきたような力を育むことができる題材である必要があります。ただ、一つの題材で全てを網羅するということではなく、年間（六年間）での積み上げが大切でしょう。



#### 先生の姿

図画工作における先生の役割は、何かを教えるというより、子どもたちの傍にいつもいて、寄り添いながら共に考え、一緒に発見を楽しみ、喜びを分かち合う存在として位置付けられているようです。

子どもたちが自分で感じ取る「主体性」を尊重しながら、時には手を添える時には引き上げながら、学びを手助けする姿は子どもたちにも伝わるでしょう。そうした先生の存在があつて初めて、子どもたちは思う存分「ためす かかわる つくりだす」力を發揮することができ、「造形的に世界を認識する」力を育むことができるのかもしれない。

# Q 4 授業中に見られると嬉しい姿や言葉

子どもたちの姿や言葉というのは、図画工作のあり方を考える上で、大切な要素と言えます。アンケートで挙げられた子どもたちの「声」から見えていきます。

## 「子どもたちの声」

- ・ほらこんなのできたよ ・やったあ ・きれい ・こんなものできちゃった
- ・先生はこう言ったけど、ぼくはこうやるよ ・もつとやりたい!
- ・次はこうするよ ・すごい! ・おもしろ! ・難しくておもしろいね
- ・これ! イイ! ・あはっはっはっは! ・ね、ね、見て ・ねえ、きいて

## 「思考し試行する」

- ・試行錯誤しながら自己更新 ・探究する姿
- ・判断しながらかいたり、つくったり、試したり

## 「つながる姿」

- ・コミュニケーションが深まっている(教師×子ども、子ども×子ども)姿
- ・友だち同士で自分の作品や活動を話し合っている姿
- ・周りの子どもたちの笑顔のうなずき
- ・友だちの表現に優しいまなざしと言葉をもって、かかわっている姿
- ・友だちの行為や作品に関心を持ち、自分の表現に生かそうとしている

## 「夢中になること、没頭すること」

- ・夢中になって活動に取り組む姿。口数は少ないが、手や目は多く動いている
- ・やってみたくいことにあふれているような、活動にぼつとうしている姿
- ・こだわりをもって探究する姿 ・熱中している
- ・子どもが活動そのものや視線そのものとなる、そのただなかに無我夢中で己をつっこんで飛び込んでいると思しき姿
- ・楽しみながらのびのびと表している姿
- ・イメージがどんどん湧いてきて、かいたりつくったりすることに夢中になっている姿
- ・子どもが本気で自分の世界をつくりだそうとする姿

## 声

子どもたちは実に多くの言葉を発します。思いがけない発見や驚き、伝えるための言葉、達成感、上手くいかない悔しさ、友だちの表現に舌を巻き思わずこぼれる言葉。活動中の言葉をこれだけ許容できるのも図画工作ならではと言えます。「いいこと考えた」というのは、気持ちにギアが入った証拠の言葉のようです。自分自身にとって「いいこと」を見つけたという感覚自体が発見であり自己肯定感へとつながります。

## しこう(試行思考)する

何度も試したりやり直したりしながら納得のいく形や色を見付けていくことは、教わった方法を繰り返すのとは違い、自分で自分の問題を解決していく姿です。このこと自体が子どもにとっては自己更新(成長≡学び)です。そんな中、ぐっと緊張して活動した後「フー」と息を吐く様子は、子どもの達成感と同時に見守る先生にも達成感が生まれる瞬間でしょう。

## つながる

子どもたちが「かわる」姿も大切な姿です。子ども同士だけではなく、先生にも働きかける姿に、驚きと喜びを感じます。「子どもがとらえている世界のあり様から私たち大人が学び直す」という、先生自身の更新ができるのも、図画工作の特長です。

## 子ども自身が学んでいる姿

何より嬉しいのは子どもたちが「夢



# Q5 図画工作の教科書に求めること

これまで見てきた図画工作の意義や学びを、教科書でどのように伝えるべきなのかについて考えていきたいと思います。

アンケートからは「学習のめあて」「題材」「誌面のレイアウト」「文章」といった言葉がキーワードとして浮かび上がってきました。

## 「題材への言及」

- ・子どもがそのページを見て「楽しそう!」と期待できる題材の提供
- ・子どもの「やってみよう!」が生まれるもの
- ・児童、専門でない先生方、保護者にも、「おもしろそう。やってみよう」と魅力ある題材
- ・新しい考えの題材
- ・子どもも先生も……心がひらき、身体がぞくぞく動き出すような

## 「学習のめあて」

- ・学ぶ目的が、明快なビジョンとともに理解・納得できるような教科書
- ・Q1~Q4のような姿が具現化されている誌面
- ・何を大事にするのか、ねらいは何なのか大事にするべきポイントが示されていること
- ・ねらいが明確に表現され、そのねらいに向かう実践はある程度多様であること
- ・「こんな学びを経験してみよう」というメッセージ

## 「誌面」

- ・わくわくするようなきれいな写真
- ・活動のようすがよくわかる写真
- ・繰り返し何回も見て楽しめる
- ・すてきな表情にあふれている
- ・情景写真や作品の写真から、「先生これしたい!」という声が聞かれるような息遣いが聞こえてくるような、ライブ感覚が感じ取れる
- ・大人が見て、楽しい本
- ・思わず自分もやってみたくなる身体性を喚起するような造形性(写真、イメージ)
- ・厳選された文章
- ・子どものよさをひきだすための言葉かけ、支援の仕方



### 題材のあり方

教科書の誌面の多くは「題材例」で占められています。それぞれの題材例をどのように提示するかは、子どもや学校、地域などの実態に合わせて決められることですが、その核となる「題材」自体の提案は教科書の重要な要素になります。子どもたちが関心をもち、意欲を高める題材であることはもちろん、どんな子どもにも魅力的な題材と同時に、時代を反映した題材を提案することが求められています。

### 学習のめあて

これまで見てきたように「題材」は力を育むためのいわば「手段」にあたり、





その題材でどのような力を育みたいのかということが明確である必要があります。

新しい教科書では全ての題材に「学習のめあて」を題材の入口に四つの観点で示しています。アンケートの回答からもわかるように、これらは「題材」の入口に提示されることで「ねらい」としての機能を発揮し評価にもつながっています。

これらを含めた言葉のあり方は十分に検討されるべき要素です。子どもたちの「声」が授業中の重要な要素になるように、視覚的な情報を端的に解説するような言葉も重要になります。

### 共感を呼ぶ写真

図画工作の教科書では、その特性からも視覚的な要素が重要です。実際の授業の様子は子どもたちの「共感する力」に働きかけ、子どもたちの関心や意欲を高めることができます。そのため、教科書では「ためす かかわる つくりだす」子どもたちの姿を多く掲載しています。

### 主体的な活動のために

その他にも「材料や用具の扱いや例などが具体的に載っている」「用具の使い方」といった子どもの活動を支える情報や「迷ったり立ち止まって考えているときに表したいことや方法を決めるために必要な情報を与えたり示唆してくれたりする」「子どものための授業のヒント」といったことが挙げられました。これらは、子どもの主体的な活動のために必要な要素です。

### 教科書は教科の意味を伝える媒体

アンケートでは、教科書は一体誰に向けてのものなのか、ということにも触れられました。「子ども」「先生」ともいう一者「保護者」の存在も重要視されています。「図画工作とは」といったことや意義、ねらいに関して、子どもや指導する先生はもちろん、「保護者」に対しても伝えていく必要があり、「保護者」の最も近くにある媒体もまた教科書なのです。

いずれにしても「出会いがあり、対話のできる教科書」「開いたときにワクワクするような誌面」というのが、ある意味では最も根源的で重要な要素なのかもしれません。



## 6 これからの図画工作に期待する事は？

図画工作は、学習指導要領の改訂のたびに存続の危機に晒されています。しかしここまで見てきたように、図画工作でしか学べないことは確かにあり、それは人間の成長の根源に関わることでした。

では、これからの図画工作はどのような役割を担う必要があるのでしょうか？

## 「図画工作の在り方」

- ・人間が生きてく基本的な姿勢に〈クリエイティビティ〉というものがあり
- ・人間が生きてく基本的な能力の育成を支えるものとして
- ・教育的意義の再確認
- ・生活全般に波及するような学習
- ・人間形成に不可欠であるということを教科の在り方として伝えていくこと
- ・何故、図工が子どもの成長に必要なのか、図工を通してどのような力を育むかを学校や、保護者、地域や社会に向けてアピールし、図工の意味や価値を再認識する

## 「つくり出すことの意味」

- ・身体性に注目した……匂いや手触り、自然なからだの動きからくる線や感覚
- ・明日は〈くる〉ものではなく、自分たちで〈つくる〉ものだという思いや意思、心身の感覚を、子どもたちに具体的に伝え感じとらせてあげたい。作品をつくる姿、うまくいかずにやり直す姿……など、図工で見せる子どもたちの姿に……
- 〈明日をつくる〉青年たちが重なってみえる
- ・子どもが自分の未来をつくりだすことができるような図画工作の在り方
- ・幼少期において、外にある答えを求めめるのではなく、自身の体で感じてかくことやつくること＝表現すること、受けとめることの中で自身の中に答えをつくりだすこと……はもつと重視され、多くの人に共有されるべき

## 「様々な階層の要求」

- ・教科外や放課後、総合的な学習や学校行事などの時間にも生かされる
- ・子どもたちが自らを安心して解放しながら意欲的に学習できる教科
- ・生活を豊かにするために必要な、形や色、イメージで考え、表す力の育成
- ・子どもの成長を支援する教科



## 図画工作の意義を伝えていくこと

「教科として独立しているか否かは、あまり問題ではない……視覚的で造形的な思考力は……基盤となる能力なのでそれをしっかりと育てなければならぬ」という回答もありましたが、現状これらの役割は図画工作が担っています。だとすれば、ここまで見てきた「図画工作」を、広く社会に伝えていく必要があります。「保護者」を含めた広く社会に対して、図画工作で行われている「つくる」ということが「生きる」ことそのものであり、「自分」と「世界」の確認と更新の作業である、と強く発信していくことが求められています。

## つくりだすことの意味

「つくりだす」ことは「ものづくり」というレベルを超えて更に重要になるでしょう。図画工作が担うべき役割も、大きくなると考えられます。

その際「身体」は重要な要素です。デジタル機器が発達し、仮想的な経験が取り巻こうとも、人間は感覚器官を使い、身体を通して世界と対話する存在であることには変わりません。図画工作はそうした人間のあり様を否応なく実感する教科なのです。

## 広がる役割 子どもと寄り添う

他にも様々な階層の役割が図画工作に期待されていますが、まずは「いろいろな子どもがいて、同じ子どもでもいろいろな状態がある」「子どもたちの多様性と総合性に応じる」「子どもの今を大切に」「子どもの生成りのよさ」を知り、子どもに寄り添うことが求められているのかもしれない。



# Q 7 先生方に一言

メッセージという形を借りてそこで語られたのは、先生方の「子どもの成長への思い」「図画工作への思い」「教育への思い」といったものでした。最後に、図画工作を好きな先生、大切に思ってくださいる先生に対しての言葉を見ていきたいと思えます。

## 「図画工作とは」

- ・形や色、イメージで楽しく考え、表す力は、学力を確かなものにする大切な要素
- ・その他の時間で輝けない子どもが、唯一光輝くチャンスのある時間
- ・人間の成長にとって必要な様々な経験をさせてくれる
- ・面白く、可能性のある教科

## 「子どもと寄り添う」

- ・子どもの世界が輝き、よさや可能性、一人ひとりの魅力が際限なく見られる時間
- ・子ども時代を充実感と共に確かに生きる
- ・子どもの優しさにふれ、発想力に驚き、技能に感心する
- ・いっばい自分を表現できる
- ・その子らしさが輝く、子どもにとってかけがえのない大切な時間と空間
- ・子どもの中に図工の答えはあり、面白さも、工夫も、発想も……
- ・価値観を実感するための製作行為およびその過程
- ・図工好きの子どもをたくさん増やしてほしい
- ・独創的な視点で世界を眺めています
- ・子どもの数だけそのきらめきはあるはずですよ
- ・……その多様なきらめきを見逃さないように
- ・まずは子ども理解からはじめよう。はじめに子どももありき
- ・わくわく感丸出し、やる気いっばいの子どもたち……の気持ちを大切に、つくることを存分に楽しんでほしい
- ・子どもが自己判断と自己決定をすることができるような
- ・情報や材料その他の環境を是非整備してください
- ・子どもの素晴らしい世界を味わってほしい
- ・子どもの手を鍛えてください。子どもの手を見てください
- ・等身大の子どもをみて実践してほしいです
- ・子どもの《声》をよく聞くことのできる人になってください

## 子どもに寄り添う教科

図画工作が一つの解を求めると、図画工作という教科自体も「こうあるべき」という唯一の「型」があるわけではなく、子どもたちの（というよりは人間の）成長を助ける（もしくは見届ける）ための時間と考えるべきなのかもしれません。そのためにはまず子どもたちに寄り添うことが大切なのでしょう。

## 先生もともに成長する

こうして寄り添うことで、成長するのは子どもだけではありません。子どもの成長を助けるということは、先生自身が常に子どもと一緒に成長し続けることです。

## ではどうすればいいのか

「子どもたちのことをもっともっと好



きになって」「もっと、もっと！先生が図工を楽しんでください」  
それは、子どもたちの周りにいる我々大人が「図工し続けること」を楽しむことにほかならないのです。



## 「成長する先生」

- ・子どもから学ぶ。……共感できる先生に。
- ・……しなやかに先生は自己変容、編み直しを続けたい
- ・（子どものしていることを面白がる）ことで、
- ・私たち大人に見えなくなっている世界のあり様が見える
- ・先生方も子どもたちと共に成長していきましょう
- ・図工の授業は先生を育てます
- ・自分の事よりも嬉しいと思える時間
- ・子どもたちからたくさんのお話を教えてもらった気がする。
- ・絶えず自己研鑽を重ね自分自身を磨くことが子どもの成長につながる
- ・悩んだら子どもにきいてみてください
- ・図工や子どものことを真剣に楽しんで考え、実践していくことは、先生自身の考え方や生き方を豊かにしていくと思います。
- ・子どもたちに支えられているということ
- ・忘れないでほしいと思います。



# 「設場の」 「定の」

## 図工しよう 事前計画編

文とイラスト  
阿部宏行  
北海道教育大学岩見沢校 准教授

### まず年間指導計画

まず、年度初めに教科書を開いて、自校の年間指導計画と併せて確認します。通知表など保護者へ通知する時期にも考慮して観点別の評価を実施することができるか、また学習指導要領の表現(1)(2)がバランスよく配列されているかなどを調整します。

年度初めの授業では、年間を通じてどんな学習があるのか子どもたちと図画工作の教科書を見ながら関心を高めるのでもいいですね。

### まず題材

年間指導計画が決まったら、次は題材です。子どもの発達を踏まえて、学習指導要領の趣旨をもとに自主題材を開発することができます。教科書には「題材題材例名含む」が掲載されていますので参考にしてください。

この題材名は黒板などに書いて授業の内容を伝えるとともに、子どもの意欲を



喚起する重要な役割をもっていますので題材名を工夫しましょう。

### まず学習指導案

題材の目標をしっかりと立てます。目標と表裏一体なのが「評価」です。この題材を通して、どんな資質や能力を育てようとするのか重点化を図るとよいでしょう。教科書には小黒板に「学習のめあて」として、主な題材の目標が掲載されています。

子どもの「学習のめあて」は、四つすべて目標に立てるのではなく、それぞれ授業内容と合わせて、時間ごとに重点化することができます。これは「評価規準」ともなります。単位授業時間あたり一つの観点で評価することを考えると、その多くの時間は「発想や構想の能力」と「創造的な技能」の表れを考慮して、それぞれ評価するのがよいでしょう。「造形への関心・意欲・態度」は、いくつかの題材を通して、見取りましょう。

指導することを前提として、評価は成



立しますから、「鑑賞の能力」の評価規準は、鑑賞の時間が十分保障されるときに設けます。

評価規準を設けないときの能力の表れなどは、メモなどで記録して、年間や学期などの総括的な評価の資料とします。

### まず教材研究と準備

教科書には、その題材で使う用具や材料が明記されています。情景写真などからも判断して、子どもの発想を広げる材料などを準備するために保護者に協力を求める場合には、あらかじめ「おたより」などで伝えます。

授業が近付いてきたら、教材研究です。工作や立体など、新しい用具や材料と出合う題材では特に、子どもと同じものを使って事前につくるなどして、つまずきやすいところを予測することが大切です。図画工作の教科書には、安全を考慮するための注意点なども掲載されています。



# 子どもと一緒に学ぶ

## かけがえのない存在としての『あなた』

帝京大学教育学部専任講師 辻政博

### 一 身近な他者の存在

昨年、母が亡くなりました。冷たくなった身体は、もう、すでに動くことはありません。思えば、あまりに身近である存在は、日常の中にとけ込んでいて、自分の意識の中に、対象として浮かび上がることはありません。

「孝行をしたい時に親はなし」という言葉があります。死という日常の彼方に去ってしまった、はじめてその存在の確かさに気付くことがあります。その存在は、記憶の中に堆積して、自分の一部をかたちづくっているように思います。

世間的に言えば、無名な存在ですが、私にとっては、最も身近な、私の成長にとって、欠かすことのできない存在です。肉親を例にとりましたが、身内以外でも、人の成長には、身近な他者の存在は、欠かすことができません。

### 二 「教師」という存在

「教師」という存在もまた、たんに、知識を伝達する者という以上に、同じ時間や空間を過ごし、生きる子どもにとっても、もつとも頼りになり、かつ、自分の



存在を承認し、世界を開いていく学びの場を保障してくれる大切な存在であると言えます。

近年は「教師」としての外面的な機能が、多々問われ、「教育の成果」や「説明責任」というようなことばかりが、喧伝されています。

けれども、「知識を伝達する」「能力を

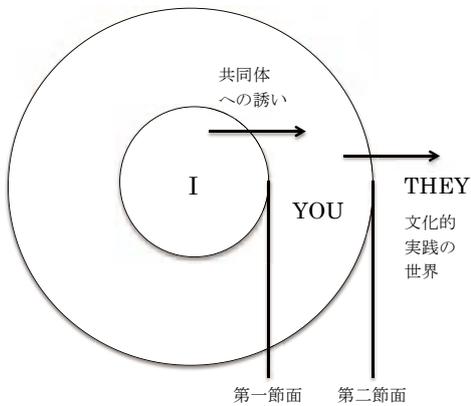


図1 「かかわりのドーナツ」  
佐伯胖著『幼児教育へのいざない』（東京大学出版会 2001）

### 三 二人称的存在

伸長する」という役割を介在させつつも、より深いところで、子どもの存在を支えていくというのは、教師という仕事の、言わば秘匿的な性質をもつ、最も重要な本質が隠れており、表には出にくいものなのですが、子どもの学びや教育の営みの原動力となるものが、そこにあります。

認知心理学者の佐伯胖氏は、教育の場における人のかかわりを「ドーナツ論」(図1)として提案しています。(注1) 「私」という一人称は、「あなた」という二人称とかかわりながら、さらに、三人称な世界とつながっているという、この世界における人の関係性を示したものです。

「子ども」は、身近な他者である「あなた」(教師)とかかわる中で、世界を知り、自分を成立させていきます。ここで大切なことは、すでにある客観



的な世界の知識を、教師が、教材や指導を通して、子どもに注入していくことではありません。そうではなく、子どもは、あなたとのかかわりを通して、世界を広げ、学んでいくという事実や経験が大切なのです。

考えてみると、教師の存在は、教育というシステムの上に成立しており、その言葉や態度は、暗黙に「〜こうあるべき」という教化的な意味性をまといつつ、子どもに放たれます。案外、こうした性向に、教師自身は無頓着な場合が多いようです。システムのなかに自らがいると、それは空気のように当たり前の存在となってしまう、気付きにくいのかも知れません。けれども、教師が自分の存在を相対化しながら、上からの一方的な視線を脱して、子どもの学びのプロセスに

かかわっていくことはたいへん重要です。目の前にいる生身の子どもに寄り添うことから始めることが大切なのです。

寄り添うとは、理解と共感です。子どもの興味や関心、ヒト・モノ・コトのかかわりを、子どもの視線や気持ちに寄り添い、共に発見し、驚き、喜ぶということのなかにこそ、子どもの学びへの手ごたえが生まれてきます。そして「〜こうあるべき」は「願い」へと変質し、子どもに受容されるのです。

同時に、教師としての学びそのものも、こうした活動のなかに折り込まれているのです。というのも、こうした学びの場を提供するのは、教師であるからです。

#### 四 形・色・イメージを媒介にした学び

造形表現は、「言葉」とは、異なる「形」や「色」や「イメージ」など表現の「媒介」として、特徴をもつものです。(注2)

これは、文字通りの「言葉」が、人間にとって欠かせない媒介であるのと同様に、もう一つの欠かせない「言葉」でもあります。それは、世界を概念の連なりでとらえ、思考していくことと同時に、物事をイメージや情景としてとらえ、考えていく方法です。

子どもが成長していく過程で、造形的な表現や活動は、欠かすことのできないものです。そこでは、子どもは、自らの身体や感性を働かせながら、モノとかかわり、他者とかかわり、様々なコトとかかわるなかで、自分自身の意味を紡ぎ出していきます。さらに、それは、他者と



意味や価値を共有していく営みでもあります。子どもたちのこうした活動を見ると、子どもは、実に有能で前向きな存在であることが実感できます。

教師の役割は、これまでのように、機械的に表現の内容や方法を子どもに教え込み、それをなぞらせるだけではなく、子どもの能動的な学びが展開するような「資源」をいかに準備、設定できるかということが大切になってくるでしょう。資源とは、子どもの学びにとって、利用可能な環境です。

子どもの発する様々な「声」（無言の声も含めて）に聞き入りながら、学びの場を創造していくことが大切ではないでしょうか。

# 授業実践

学びのフロンティア

小学校5・6年向き

## びっくりに！トリックワールド

ミラーシートを使って

兵庫県芦屋市立岩園小学校 石井真里

### はじめに

「これで、何をつくるの？」  
子どもは材料に対して意欲的に関わりとうしますが、普段あまり登場しないものには、また特段の興味を示すものです。今回は、日常生活では身近にあるものの、材料としてはあまりお目見えしないミラー（鏡）を使用する作品づくりに取り組んでみました。

### 材料の特徴を生かし自分の思いを表現する

#### ミラーとの出会い

まず始めに、子どもたちにA4サイズのミラーシートを渡します。手にした途端に自分や友だちの顔、持ち物や教室の中を映しては「うわ、見えた、見えた！」と大はしゃぎ。また、プラスチックの素材なので容易に曲げることもできます。子どもたちは自分の顔を縦長や横長に映してみても変顔づくり(?)に精を出し

たり、ミラーを顔に近付けて向こう側を覗き込み、どれだけ遠くまで映っているかを確かめたりして、ミラーと触れ合いながらその特徴を理解していきました。

ミラーは決して珍しくありませんが、手前側と無限に広がる向こう側という異次元の世界を覗くことのできる、魅力的で妖しいものなのかもしれません。

#### 映り方を試す

いきなりミラーを渡されて「作品をつくりましょう」では、少なからず戸惑いがあります。そこで子どもたちには、画用紙を丸や四角に切ったパーツをミラーに映して見せ、映り方のパターンをいくつか例示しました。

例えばミラーが一枚の場合、一つの丸いパーツは二つに、半円形のパーツの直線部分をミラーに付ければ全円に見えます。ミラーを二枚用いる場合は、ミラーを直角に合わせると映すとパーツが四つに、先ほどの

半円形のパーツは全円が二つに見えることになります。

更に子どもたちには、自分で自由な形のパーツをつくり、実際に操作しながら映り方を理解させることにしました。初めのうちは単純に一つのパーツが二つに増えることを喜んでいましたが、パーツをミラーに貼り付けることで空中に浮かんでいるように見せたり、ミラー二枚を合わせる角度を狭くしてパーツが小さく見えるように映してみたりするなど、次々にアイデアを考え出して映り方のパターンを増やしていきました。

このようなお試しを繰り返し、友だちとアイデアや工夫点を交流する機会を授業の折々に設定することで、



映り方への理解を深め、更に発想を広げていきました。

#### トリックを仕掛ける

様々にお試しをした中から作品に使用するアイデアを選び、簡単に画用紙でパーツをつくり、ミラーへの映り具合を確認しておきます。

次に、ミラーシートを波打たせたり汚したりしないよう丁寧に段ボールでつくった台紙へ貼り付けます。その後、色画用紙、紙粘土、絵の具などの材料を使ってつくっていきま

す。  
このような材料を使用することで、形だけではなく、着色によっても様々なトリックを仕掛けられるようになります。

例えば、手前のものと異なるものがミラーに映るように見えるパターンがあります。人間をつくった場合、ミラーに映る前面の服を赤色に着色します。すると、ミラー内の人間の服も赤色となります。ところがミラーに映らない背面を青色にすると、



### 指導計画

|         |   |
|---------|---|
| 時間      | 6～8時間   |
| 領域      | A表現(2)  |
| 材料      | ミラーシート、板段ボール、紙粘土、色画用紙、絵の具など   |
| 学習目標    | ミラーの特徴を生かして、発想を広げながら様々な形や色を考え、工夫して立体に表す   |
| 主な学習内容  | <ul style="list-style-type: none"> <li>●様々な試しながらミラーシートに映る仕組みを理解し、その効果や面白さを考える</li> <li>●つくりたいものに合わせて材料を選び、表し方を考えながらつくる</li> </ul>   |
| 主な評価の観点 | <ul style="list-style-type: none"> <li>●ミラーの特徴をとらえて、様々な試しながら自分の思いに合ったものをつくりだそうとしている(造形への関心・意欲・態度)</li> <li>●ミラーの特徴を生かしながら、効果や面白さを考えて表している(発想や構想の能力)</li> <li>●ミラーや用具の特徴を生かしながら、形や色を考え、表し方やつくり方を工夫している(創造的な技能)</li> <li>●自分や友だちの作品に対して関心を持ち、その違いや面白さを感じ取り、伝えたり話し合ったりしている(鑑賞の能力)</li> </ul> |



つくりたいもののために  
**使い方を習得**  
 ミラーの中の世界を本物らしく見せるためには、台上のものと同じようにつくりなくてはなりません。そのため布や毛糸、モールなどの材料も使うことになりました。また、板や針金などを使うためには様々な用具も必要になります。そのためにベ

この題材は、つくりだす過程において多種多様に発想されていくので、こちらが思いもかけなかったアイデアに対して感心することしきりでした。ミラーという材料はそれだけ魅力があり、まだまだ題材づくりの幅が広がる可能性があるのではと感じました。

ンチや電動糸のこぎりなどの用具の使い方も積極的に習得していくようになりました。

**授業を終えて**

作品を校内作品展に展示した際には、全校生や保護者にもミラーのこちら側と向こう側に広がる世界に対して、十分な興味や感心をもってもらえました。子どもたちは、自分の作品が参観者をも引き付けられる魅力的なものであったことに喜びを感じ、つくり上げた満足感が更に増している様子でした。

# 図画工作における

## 学びを支援する教科書

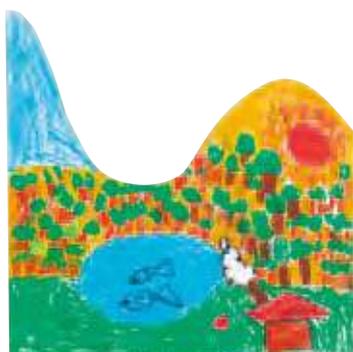
国立大学法人兵庫教育大学理事・副学長 福本 謹一

### 「図画工作の学び [日常の中の学びを見取る]」

小学校一年生のクレヨン箱を覗いてみると、使い込んでそれぞれの色のクレヨンが短くなっている箱、扱いが乱暴なかどのクレヨンも紙がめくれたり折れたりしている箱、オレンジ色と黒色が好きなのか他の色に比べて二本がずいぶん短くなっている箱などその子の性格、色に対する嗜好、造形の経験値などの写し絵になっていてほえまらずにはいられません。この子たちが図画工作の学習を眼を輝かせて心待ちにするように導いていくには、子どもたちの活動を学びとして位置付けて導く教師の役割が重要です。そのためには、いろいろな場面で学びの要素を見取っていく必要があります。

例えば、砂場遊びは言葉通り遊びには変わりありませんが、一年生がどのような学びをするのかを考えてみると、「何かをつくりたいな」という思いやイメージの生成という主体的造形学習態度の要素、「砂は乾くとさらさらだけど、水を付けると固まるよ」という材料の性質を知る要素、「すぐ崩れないようにするにはどうしたらいいかな?」という問題を、手の操作を通して試行錯誤したり材料の

感性をゆさぶる表現の喜び  
「いつでもどこでも表現できる」  
環境設定をする」



新しい教科書には、「あんなところでこんなところだ」という題材ページ(5・

いろいろなかたちのかみから おもいついたことを。

### いろいろなかたちのかみから

いろいろなかたちのかみがあるね。なにをかこうかな。

いろいろなむきからかみをみてみよう。

くるくるまわしてみたら、いろいろなかたちがみえてきたよ。

いろいろなかたのカミにかこう。

- かきたいことをかんがえよう。
- かきかたをくふうしよう。
- ともだちのくふうをみつけよう。

かみがながいからせのたがいたてものをかいたよ。

さかになつた。

アイスにみえたよ。

↑ わたしのやまともりといけといえ (39×38cm/1/2ス)

↑ じゅうすやさん(33×38cm/1/2ス) やねにみえたよ。

↑ やまとくものこうえん(6×15cm/1/2ス) いろをかえてみつつのやまにしたらよ。

↑ にぎやかなまち (38×52cm/いろがようし、だんボール、クレヨン など)

はこをひらいたかたちがまちにみえたよ。いろがようしにはってまわりもかいたよ。

たのしいおさんぽ (30×54cm/クレヨン、えのこ) キリンがならんてあるいてるよ。

かいたえをおおきなかみにはってもいいね。

↑ にじいろのせかい(27×39cm/いろがようし、クレヨン、ペン) くもやふねやのこざりをおもいついたよ。いろいろないろをつけたよ。

↑ たのしいことがいっぱいかいたよ。こんどはどんなかたのカミにかこうかな。



6上)がありますが、階段の隅っこや靴箱を利用してその場所にふさわしい造形を考えたり、木の枝の陰の輪郭をなぞったりすることは、日常の至る所に造形につながる発想が潜んでいると認識できることにつながります。このような題材発想ができるかどうかは、教師の心がけによります。雨上がりの放課後には、廊下の傘立てに残り傘があったりします。低学年の教師ならば、次の日の朝に「今日の傘立てさん、寂しそうだね」と声がけをするだけで、子どもたちが「傘立てさんに何かプレゼントしよう」とか「傘立てさんのお家を飾ってあげよう」といった提案をしてくれるかもしれません。そうしたちょっとした支援が普段から大切だと思えます。このような子どもたちの発想を柔軟にして、感性をゆさぶる支援ツールが図画工作の教科書でもあります。

### 授業の始まりはいつも…… 【学習のめあてを明確化する】

新しい図画工作の教科書では、各題材の始まりに小さな黒板がかけられています。この黒板には評価の観点を反映した学習のめあてがまとめられています。低学年の「いろいろなかたちのかみから」「1・2上」という題材では、「いろいろなかたちのかみにかこう」「関心・意欲・態度」「かきたいことをかんがえよう」「(発想・構想)」「かきかたをくふうしよう」「(創造的技能)」「ともだちのくふうをみつげよう」「(鑑賞)」といった具合です。このような教科書のデザインは、感性や

想像力を育む教科書の特性を反映しながらも「学習材」としての位置付けを明確にしています。

子どもたちはそこに明示されためあてを意識して造形学習をし、授業の最後にはその資質能力を達成しているかどうかを振り返る一連の学びを積み重ねることが大切です。

### 思いのままに 【主題生成を支援する】

大正時代に「随意選題」という言葉がありました。国語の綴り方教育の中で生まれたもので、子どもが生活から見出したものをもとに自分の言葉で書き綴るといふものです。絵画教育において生活経験の中から自分なりの見方で気付いたことと思いついたことを自由にテーマを決めてかくという生活画の原点となりました。

この主体的な造形態度の形成につながる考えは、図画工作科の学習指導要領にある「自分の思い」「思いのままに」「表したい思い」「その子らしい主題」といった形で息づいており、それが中学校美術科の学習指導要領にある「主題を生み出すこと」にもつながっています。

行為を通して偶然生まれた色や形をもとに発想するものであれ、材料との関わりからひらめく工夫であれ、物語から想像したイメージを色や形に表すものであれ、自分なりの思いや主題を形成できるように支援することが大切です。

教師に求められるのは、教師のイメージに近付けるような指導をするのではな

く、教科書題材をヒントに子どもの思いに寄り添う学習のファシリテーターとなることです。

### 見ることを楽しむ 【鑑賞事始め】

鑑賞ついでと、どうも苦手だという答えが返ってきます。知識がないからとか、どんな作品を選べばいいのかわからないからと言うのです。でも子どもたちの筆箱の中の鉛筆やものさしの中から気に入った理由を話し合うことから鑑賞を

出発することも可能です。話し合ううちに形や色の面白さだけでなく、「入学の時にあちゃんからもらったので大切にしているよ」といった人とモノとの関わりにつながることもあります。

美術作品や伝統文化の有名作品だけが鑑賞対象ではありません。ともかく見ることを楽しむことから始めたいものです。

### おわりに

図画工作における学びとは、楽しさを軸に他教科では養うことのできない感性や想像する力を羽ばたかせるものと考えます。それをさりげなく支える学習メディアが図画工作の教科書なのです。

# 先 ず 見 る

## 之 凡 目 凡

### 第 六 回

## 光と運動と空間

四角く囲われた真つ暗な空間の床には、先頭に小さな、しかし強く光るLEDの照明をつけた鉄道模型がゆっくと走っています。線路の両側、周囲には大小さまざまな日用品が配置されており、中にはトンネル状に線路を被っているものもあります。その明かりに照らされた日用品の影が、あるいは日用品に遮られて生じる光の漏れが、壁や天井に大きく映し出されます。鉄道模型の走行に伴い明かりが移動するにつれて、固定されている日用品の影が、まるで車窓から風景を眺めているかのような映像となって動き出します。それは、あたかも観者が鉄道模型に乗って、風景を見ているかのような錯覚を与えるかもしれません。また影は、ときに巨大なドーム状の駅舎や長く暗いトンネルとなって空間全体を、またその中にいる観者を包囲します。

この作品には、フィルムやビデオといった再生装置も、プロジェクタやモニターといった投影／表示装置も使用されてはいませんが、映像作品と言って差し支えないでしょう。LED照明の光源とその運動、そして、それが照らす物体と影を投影するための空間によって、映像がまさにその場で生み出されます。それは、一八世紀末に発明された幻灯機を用いた映像装置、ファンタスマゴリアのように、よく見慣れた、陳腐でさえあるような日用品の姿を、それらが本来持つ物質的特性や形態的特徴から引き離し、どこかノスタ



ルジックにも感じられる、都市のような風景に変容（メタモルフォーズ）させてしまうのです。また、観者それぞれが自身のイメージネーションを発動させ、さまざまな映像を喚起させる装置とも言えるでしょう。

この作品では、点光源と呼ばれる、光が放射状に広がる性質を持つ光源を使用し、光源と対象物の位置関係が近ければ影は大きくなり、遠ければ小さくなるという原理を利用しています。作品の題名にもなっている「点・線・面」に倣えば、光源としての「点」が、運動の軌跡としての「線」によって、影という物体の断面としての「面」が生み出されています。

『点・線・面』は、一九二六年に抽象芸術の祖であるワシリー・カンディンスキーが、パウハウスでの自身の講義でも使用した理論的著作の書名です。一九三〇年代におなじくパウハウスで教鞭をとっていたラースロー・モホイ＝ナジが制作した《光・空間・調節器》（一九二二～三〇）は、モーターによって回転する、光を反射する金属板や透過する透明のプレキシガラスによって、周囲の壁面に運動を伴う光のパターンを投影する作品で、「光による造形」を目指したものでした。こうした作品は、二〇世紀初頭より絶え間なく続けられている、より今日的な表現技法や素材を模索するための試みでもあるのです。

畠中実 はたなか みのる  
 一九六八年東京都生まれ。NTTインターコミュニケーション・センター「ICC」主任学芸員。主な展覧会に「サイレント・ダイアローグ」（二〇〇七）『みえないいちから』（二〇一〇）『磯崎新 都市ソラリス』（二〇一三）など。

光・空間・調節器 1922～30 ラースロー・モホイ＝ナジ [1895～1946]  
 「モホイ＝ナジ/イン・モーション」展（京都国立近代美術館、2011年）での展示風景 写真提供：京都国立近代美術館

# 「設場の定」

## 図工しよう 授業編

文とイラスト  
阿部宏行

北海道教育大学岩見沢校 准教授

いよいよ授業前日です。材料や用具の不足はないか、子どもたちの動線はどうか、安全に活動できるかなど確認します。また、授業記録にはデジタルカメラが有効です。活動の様子を記録するとともに、作品に至るまでの過程をカメラで記録することで評価に役立ちます。教室に作品を掲示することは大切ですが、楽しく活動している情景写真も保護者などに公開すると、作品からでは見えない子どものよさを伝えることができます。

### まず提案は

さて、授業は教師の提案から始まりま  
す。図画工作の教科書には、教師の提案  
例が掲載されています。

子どもの活動時間を十分に保障する観  
点からも、授業始めの指示や説明は、で  
きるだけ簡潔にするとともに、興味を喚  
起する工夫を考えます。

板書案をあらかじめ考えましょう。授  
業のねらいや内容、そして、題材や授業  
の時間配分など、見直しをもたせるため  
に黒板を活用することは有効です。

今日の授業のねらいと、子どもが個々



にもつ目標を教科書に掲載されている小  
黒板を参考に確認することもいいで  
しょう。

さらに子どもの発想を広げる発問、適  
切な指示や説明を考えましょう。教科書  
の情景写真の様子とコメントが支援する  
手がかりになります。

場の設定では、友だちの製作過程を見  
たり、情報交換がしやすいように座席を  
工夫したりし、材料や用具の場所と製作  
場所の関係を鑑賞の能力が発揮できる場  
と考えることが大切です。

### 授業では

授業の目標が子どもの発達や実態、学  
習指導要領の趣旨とかけ離れていると先  
生の指示や説明だけが多くなり、子ども  
の資質や能力が発揮されにくくなります。  
授業案は骨組みをおさえます。指導は子  
ども個々の思いを受け取り、その思いに  
応じた支援をすることが求められます。

授業中は、子どもにも活動のよさを具体的  
に「(作品の)ここが、いいね」「このあ  
とどうなるのかな。楽しみななあ」など、  
期待を込めて一人ひとりに声をかけるよ



うにしましょう。

評価は子どものよさを見取るように具  
体的に設定し、授業で評価したものは評  
価情報として大切に保管しましょう。

### 子どものよさ

各題材で得られた評価情報は、学期の  
おわりの観点別の評価の総括に集約され  
ることになります。

図画工作における子どものよさを保護  
者会で具体的に話したり、通信簿に記入  
したりできるように、コメントをまとめ  
ておくことも大切です。

また、作品にはよさを具体的に記入す  
ると子どもの励みになります。

図画工作は、子どもの主体的な造形活  
動を通して「つくりだす喜び」を経験す  
ることが大切です。いよいよ教室の子ど  
もたちとの第一歩です。

まずこうしよう

ま・図工しよう!



# ●ともに学ぶ

## 図工・美術の先生と子どもが、ともにつくりだす学びの日々。

### ●「教科書的」とは？

ヤフーの「知恵袋」にこんな問答が載っていました。

質問「会社である提案をしたところ、〈教科書的だ〉と批判を受けました。……教科書的という言葉が持つ意味と、そういうわれないようにするためにどのような工夫をすればよいかを教えてください。」

以下がベストアンサーとされます。

「教科書には試験(今回の場合、企画コンセプト等)などに向けての大事な項目だけしか載っていません。なので人を惹きつける魅力的な部分が少ないです。……対策としては柔らかいタッチにしてみたり、遊び心を入れてみたりしては如何でしょうか。……感覚的にいうとちよつと要点が分かりづらい教科書くらいがちょうど良いかもしれません。その分かりづらさに人は興味をもってしまうのです。」

### ● 図画工作科の教科書では

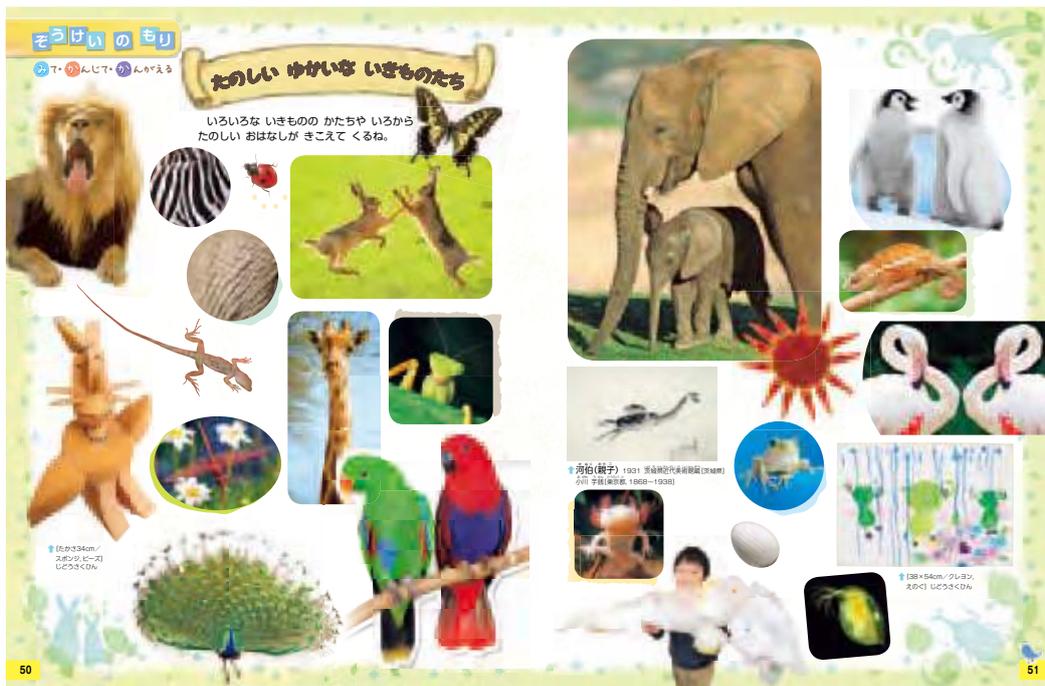
この問答の背景には、学校教育で使用される教科書について一種の禁欲的なイメージがあるようです。

ただ、ここでのアンサーは、図工の教科書にとっても示唆するところがあります。「やわらかいタッチとか遊び心」などは、「一般的にコミニケーションを円滑にする手立てであり、特に子どもが読む教科書には大切なことです。では、「ちよつと要点がわかりづらい」ことはどうでしょうか? 「わかりやすい教科書を」とよく言われます。何かを理解しようとする教科書である限り、このわかりやすさは当然、求められます。ただ、それが、ぱつと見て「要するに全員が教科書にあるこの作品をつくれればいい」という、わかりやすさであるなら、創造のプロセスにおける思考、判断、表現の活動を重視する図工の場合とは少し違います。

「わかりづらさ」を「あいまいさ」多様な選択肢の可能性として考えるなら、図工のカリキュラムとしての完成度はこの「あいまいさ」によって高められます。

最初の問答に戻れば、図工の教科書作成に関わる者として、この教科書を使う小学生が将来、大人になって〈教科書的〉だと言う時には、「楽しくやる気になさせる本」というイメージをもつようになりたいと願っています。

愛知教育大学 名誉教授 藤江充



1

127,297,686

文：田野隆太郎 写真：新井卓

第六回

# 水島尚喜

自分の中の内なる子どもに気づく。  
それを旗印にゼミ生も小学生と同じ題材でかく。  
元画学生の教育学科教授曰く、造形活動とは  
自分が世界とどう関わり生きていくかの実践。  
だから才能ある人だけのものではない。  
彼が携わる教科書は、  
すべての先生たちに向けての応援歌なのだ。

インタビュー当日の演奏は、まどみちお作「ぞうさん」。  
水島はまどさんを、詩作だけでなく絵も描くクリエイターとして尊敬している。

筆者は、小学校に上がる前から、図工の先生が主宰する絵画教室に通っていた。行きはじめてのは、共働きの両親が週末の午後を有効につ

きたい、おそらくそれくらい理由だった。教室は、トタンに覆われたおんぼろ長屋の一角。画用紙や絵の具が散乱する十畳間に、ワルから秀才までが集まっていた。先生は、皆が同じように絵を完成させなくても、一緒にかく時間さえ共有できればいいという方針。だから、洗い場で水遊びばかりしているような子がいても強制はしない。わたしは、空き地で野球をする時と同じように昼に転がり、皆と大声をあげ、画用紙に色を塗った。ふと隣を見ると、畳の上のわたしたちが羨ましかったのか、あの洗い場の子が筆を持っていた。

後年、わたしは高校生になり、美大受験のため研究所に通いはじめた。そこで思わぬことを指摘される。絵の具を混ぜすぎて濁った色をつくってしまう、そんな癖だった。デザイン科受験にはマイナスの要素。油絵をやっていた先生の影響があるのは想像に難くない。以来、わたしは子どもに癖まで伝えてしまう大人という厄介な存在を一步引いて見るようになった。だが、三十年ほど経った今でも、ものをつくる人間の端くれでいられるのは、あの先生がいてくれたからだと思ふ。野放図な先生がつくり出す世界で、皆と衣服をぐちゃぐちゃに汚したあの頃。そこ

で得たのは、絵を上手にかくこと、それだけではなかった。

水島尚喜は、人生の三分の二を美術教育とともに歩んできた。これまで関わってきたのは、小学生から大学生。この分野のスペシャリストといえる。だが、彼にはベテラン教師然としたところがまったくない。その柔らかなさは、いったいどこからくるのか。

彼は富山に生まれ、父親の仕事で富山と東京を行き来しながら少年期を過ごした。中学の時が、文化の土壌豊かな七十年代初頭。そこで彼を魅了したのは音楽だった。ラジオから流れてきたRCサクセションやビートルズが、頭の中でも鳴り続けた。自分も同じように表現したい。早速ギターを手にした。高校に上がり、今度は同級生とロックバンドを組み、ラジオにも出演した。

表現欲はそこにとどまらない。以前から好きだった絵をかき、文章も書いた。だが、これを「多感」という言葉で括るのはちがう。音楽、文章、絵……彼にとってそれらは自分を表現するということの振り幅の中にある、それらすべてを束ねる自分をつねに俯瞰しながら創作をしたい。そういう思考回路だった。

やがて進路を決める時がきた。ここで絵を選択。しかし、絵だけで食べていけるとは思わない。美術教育を学びながら制作することにした。

だから東京学芸大学に入学後も、寝る間を惜しんで描き続けた。

作品は平面から半立体へと変化していた。テーマをあらかじめ定めず、スチレンボードや絵の具などのさまざまな素材をつかい、形づくっていく。そうすることで、自分が世界とどう関わることができのかわからなかった。作品名はいつも『Untitled』。完成させることが命題ではない。素材を自分に引きよせ、自己対話を重ねながら作品を生み出す。その過程こそが重要で、何かを掴めるのは表現した後のことだと考えた。

同時に、寮の友人と絵画教室でアルバイトをした。友人は幼児、彼は小学生を担当。そこで、友人が子どもとふれあう距離感にハッとさせられた。友人は、あぐらを組んだ膝の上に子どもたちをのせ、一緒に絵を鑑賞しながらほめた。「すごいね！きれいだね！」。後に著名な絵本作家となる友人のスキンシップには、天性のものがあつた。子どもたちに心から声をかけると、喜んでどんどんかいてくれる。彼も子どもたちの世界にのめりこんだ。そこには、自身の制作では導き出せない造形的な喜びがあつた。思わぬところから新しい世界がひらけた。

「子どもの線っていうのは美しいんですよ。その体から発した混じりつけないもの、呼吸と一緒に出てくるようなものに悪いものはない。見

ているだけでみんなを笑顔にしてくれるんですから」。

一本の線をかく。それひとつとっても大人は計算してしまう。だが、子どもの線は対価を求めない。人間という動物だけに許される造形活動。その原点を見るようだった。子どもたちにとっては、描くことがすなわち生きていくということなのだ。彼は、美術教育に人生を懸けてみたいと思った。

卒業後は非常勤講師を一年経験し、小学校に正式採用。いよいよ実践の時がやってきた。通常のカリキュラムをこなす一方、先人たちが改革してきた豊かな造形教育を目指したが、子どもたちが思うようについできてくれない。理想が現実の中で空回りしていた。

「言葉の世界って、制度を定めたり、ものごとに整合性を与えるっていう意味ではとっても大事なものだと思うんですけど、美術っていうものはそれを変革させたり、新しいものにしていく力があると思うんです」。

当時の自分は「言葉」というものに捉われすぎていたという。彼にとつての「言葉」とは、本来伸びやかであるはずの造形活動と対立、抑制させるものだった。先生を「職業」としたことで、知らず知らず「言葉」をまとっていた。

しかし、その閉塞感を打破してくれる出来事が起こる。



造形活動の原点を感じた「おにぎり」

落ち込んでいたある日、水島のいる図工準備室のドアをノックする音がした。振り返ると、児童が立って、「せんせい、これ！」と石を差し出してきた。それは三角形の石をクレヨンで着色、おにぎりに見立てたものだった。思わず涙がこぼれた。

その行為に、人が人に伝えるということのすべてが詰まっていると感じた。そこに「言葉」は必要ない。大人、子どもに関わらず、人間がものをつくっていく意味合いがここにあった。なんのことはない、子どもたちから学べばいいんだ。ここから始めよう。自分にとっての教育とは、教えるものではなく子どもたちから教えられるものなのだ。そう強く思った。

それから三十年が経った。水島は文科省の学習指導要領に携わり、図画工作の教科書の著者となった。いわば、教育の枠組みを作る側の人間でもある。彼はこれまでに実践してきたことを、どう教科書に反映させているのか。

「算数や国語のように、みんなで一斉に読んでみましょう、というようない方ももちろんあるんですけど、図工の教科書は、休み時間にランドセルからこっそり取り出して見てニコニコと微笑んでくれる、そういうものを考えたんです」。

例えば、紙を切って形をつくる、小学一年生の題材。ここには、完成作品だけを掲載せず、子どもたちが切った紙を窓やドアに飾る姿が示さ

れている。飾るところまでを造形活動と捉え、実際の生活の場でも楽しめるよう促している。図画工作を教科書の中だけにとどめるのはもったいない。この教科書こそが「自分でも意味のあるものをつくり出せるのだ」という実感と自信を持つことができると、という思いを込めている。これは、水島自身が絵を描いていた時に込めた思いとまったく同じなのだ。

忌野清志郎に『ぼくの好きな先生』という曲がある。これは清志郎の高校に実在した美術教師を歌ったものだ。その教師は、職員室が嫌いで、いつも美術室で煙草を片手に絵を描いている。清志郎はその姿を「ぼくの好きな先生♪ ぼくの好きなおじさん♪」と独特の愛情表現で歌った。この曲において、彼が好きな先生は、「先生」という存在である一方、「おじさん」でもあるということだ。彼は、先生がその両面を持っている人だからこそ歌にしたかった。もし先生に「おじさん」の側面がなかったら歌いたいとは思わなかった。水島がこの曲に出会ったのは、中学二年。今でも自身の支えとなっている。

水島は現在、聖心女子大学で教育を専攻する学生を教えている。研究室には在校生はもちろん、卒業生たちも定期的に集まってくる。『水島工房』と称する会で、彼女たちは悩みを語り、時に泣き、笑う。水島は、彼女たちの話を傾けつつ、いつ

ものように「うちのゼミは、わたしの歌を聞かないと単位をあげないことにしている」と冗談を言い、ギターを手に歌う。

彼女たちが水島に引きよせられる理由は、彼の中の「おじさん」が好きたからだ。水島に教わった四年間、どれほど密度の濃いものだったのか。水島に詳細を聞こうとすると、「わたしの方が教えられることばかりで」と切り返されるにちがいない。彼の柔らかさはこういう姿勢からくるのだと思う。

筆者のあの絵画教室の先生も、畳の上で楽しそうに筆を持つわたしたちを見て、何かをこっそりと学びとっていたのかもしれない。あの先生と水島が重なって見えた。

水島尚喜 みずしまなおき  
一九五七年、富山県生まれ。東京学芸大学大学院修了。附属竹早小学校を経て、現在聖心女子大学教育学科教授。文部科学省の学習指導要領に携わり、小学校教科書の著者のひとりとして美術教育の発展に努める。

平成27年度版 小学校  
**デジタル  
教科書**

# 図画工作の 教科書が動き出す!

来春  
発売!  
(予定)

発想や構想を広げる  
作品例を豊富に収録!



教科書紙面画面



子どもたちを引き込む  
導入のための動画を用意!



つくり方や材料・用具の取り扱いも  
動画で丁寧に解説!



**CoNETS (コネッツ)**  
「共通ビューア」を採用します!

詳しくはCoNETS公式Webサイトへ!



図画工作デジタル教科書の詳細は、日文Webサイトで随時更新中! ▶

※本記事の内容および画面は開発中のものです。商品の内容は予告なく変更する場合があります。

## スマートフォンやタブレットをかざすと動画が楽しめる!

- 1 スマートフォンまたはタブレットで、ストアアプリを立ち上げます。
- 2 「カザスマート」で検索し、アプリをダウンロード。
- 3 「カザスマート」アプリを立ち上げます。
- 4 該当ページにかざすと動画がはじまります。



カザスマート





小学6年 始まる一日 [絵の具・ペン／38×54cm] 「図画工作5・6下」表紙掲載

### 児童・生徒作品 私の見方

玄関の扉から入る光に引き込まれるように絵を見ていくと、たくさんの子どもたちが目に入ってきます。ちよつと眠そうな子、仲よしの誰かを見つけたのか嬉しそうに微笑む子。傘立てに傘をさす子がいるのを見ると、この日は午後から雨の予報が出ているのかもしれない。

作者のコメントには「玄関から入る光がとても印象的だったので、一度床の色を塗つてから光の色の重ねて塗り、本当に光が差し込んでるようにしました」とあります。なるほど、と思つてもう一度絵を見ると、タイルの色だけではなく靴箱や木の床の色、置いてある植物の色も、光を意識して丁寧に塗り分けられていることに気が付きます。

新しい教科書では、作品を大きく掲載し、作者である子どもたちのコメントを数多く掲載しました。それによって細かな表現の工夫に気付いたり、作品を見ただけではわからなかった子どもたちのこだわりや思いを読み取る手助けになることをねらっています。

作品をじっくりと見て、まずは自分にとって目の前の子どもに問いかけてみてください。「あなたはどう感じますか」。

## 形 forme No.303-2014

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成26年(2014年)5月16日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5 TEL:06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

Cover photo: Takehiro Goto (YUKAI)

Design: Kazuhisa Yamamoto (Donny Grafiks)

CD33230

## 日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18-7F・B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690